

豊かさは地域の経済から



映画「幸せの経済学」の一場面

グローバル経済で私たちは幸せになれるだろうか？ ドキュメンタリー映画「幸せの経済学」の公開が、21日から東京・渋谷で始まった。22日には全国113カ所で一斉上映会がある。制作者で監督の一人のヘレナ・ノバーク・ホツジさん(65)は「豊かさを取り戻すには、地域の結びつきを育てることが大切」と話す。

映画の前半では研究者や環境活動家らへのインタビューを通じ、グローバル化が引き起こす問題を描く。長距離輸送で浪費される資源。物質的に豊かな米国で、幸福を感じる人々の割合が下がっていること。貧富の差が拡大し、対立や原理主義の台頭を生み出していること。

解決の糸口に示されるのが「ローカリゼーション」。買う人に生産現場が想像できないほど巨大に膨れあがった経済を、地域レベルにしようとする動きを取り上げる。都市の空き地で野菜を育てる米国アトロイト。風力など再生可能なエネルギーの利用。日本からは、有機農業を核に地域活性化が進む埼玉県小川町が紹介される。

スウェーデン生まれで言語学者だったヘレナさんは、1975年からインド北部ヒマラヤ近くのラダックに住み、急速な近代化のひずみを目の当たりにした。外国人立ち入り禁止地域だったが、74年に制限が解除されると、大量の商品と消費をたたえる西欧の文化が流れこみ、伝統的な暮らしが一変したという。

制作者のヘレナさん「まずは近くで食の生産を」



「特に若者は自分のアイデンティティーと伝統文化に疑問を抱き、劣ったものと感じるようになりました。こうした心理的影響も重大」。ヘレナさんはラダックで、文化や環境の保全活動をしている。

輸入製品が自国製より安く買えるとき、多くの人が効率のおかげと考える。しかしヘレナさんは、それは見せかけだと指摘する。

「巨大な多国籍企業に有利に働く世界経済の仕組みを、各国の政府が法律、規制、金融財政面で後押ししているから安いです」

そして経済を地域に取り戻すのは、専門家ではなく自分たちだと話す。

最初は食えることから。「今は食べ物を生産する現場が遠く、エネルギー、包装、冷凍に頼っています。家の近くで多様なものが収穫できるようにし、買わないこと。それが中小のビジネスを数多く生み出し、地域で働く人が増えることにもなるという。

「我々は消費文化に失望しながらも、選択肢がないと考えています。しかし、他にも道はあると考える人が増えています」。映画のラスト近くに現れるメッセージだ。

22日の一斉上映会は当初100カ所を目指したが、申し込みが目標を上回った。詳しい情報はサイト(<http://www.shiawaseno.net/>)。 (編集委員・大村美香)

ドキュメンタリー映画「幸せの経済学」